

東北芸術文化学会 創立 10 周年記念大会

学会セミナー

テーマ：「地域の美術工芸活動 - 現状と展望 - 」

日時：平成 17 年 7 月 10 日（日）10 時 30 分～12 時 / 13 時～15 時 30 分

場所：山形県郷土館・文翔館（旧県庁） 2 階第 3 会議室

〒990-0047 山形市旅籠町 3-4-51 TEL.023-635-5500

〔講演会〕 「地域の美術・工芸 - 宮城県の場合 - 」

講師：宮城県美術館学芸部長 西村勇晴氏

要旨

「美術」という言葉はウィーン万国博覧会開催の太政官布告によって、「Kunst」の訳語として生まれた。この言葉の流布に関しては宮城県では間をあまりおかずに開催された二つの博覧会が示唆的である。すなわち、明治 9 年(1876)の宮城県最初の博覧会は、書画、武器、諸技芸作品が展示されて「美術」の言葉はなく、組織も内容も従来 of 物産会の域を出なかった。また、国の内国勸業博覧会をモデルにした明治 13 年(1880)の博覧会では展示区分の第三区が「美術」であった。国の勸業政策の中で地方でもこの言葉が流布してゆく。

発表の形式としては、書画会から美術展覧会への展開がこの地でも見られる。作品の陳列、席画、時には清楽合奏を伴う、一日限りの催事であった書画会は限られた階層の催しとして存続した。幕末以来、教養としての南画があり、展覧会形式としての内国絵画共進会には本県からは南画系統の出品が一番多かった。官吏にはとくに美術を好む人が多く、絵画共進会や書画会にも参加した。国の絵画共進会は「宮城絵画会」を生むという刺激をもたらす。国同様、勸業のための美術振興策で、官が関与した会であったが形式としては書画会の域を出なかった。

しかし明治 29 年(1896)、青年美術会の結成に始まり、翌年には日本美術院最初の巡回展が仙台で開催されるなどして展覧会形式が浸透し始める。

その新しい制度に合わせて、美術教育が位置づけられることになった。明治 20 年代には、よく知られているような図画教育での鉛筆画と毛筆画の優位、選択の論争が仙台においてもあった。だが、画学教師の多くは洋画家でそのことが洋画の普及に一役買うことになる。

大正時代になると、美術の普及は一段と盛んになる。従来 of 日本画家の画塾に加えて、白馬会出身の太田美方が洋画研究所を開く。彼は東北洋画展覧会など「東北」の言葉を冠した展覧会を主宰したが、そこに黒田清輝ら白馬会の画家たちの協力もあった。またこの研究所に学んだ若者による「アンデパンダン・サロン」展も開催されたが、それはグループ展であった。

この他民間の美術教育は大正 5 年(1916)に仙台洋画研究所が菱沼美仙によって設立され、大正 12 年(1923)まで続いた。その年に東北洋画研究所が草叢会同人によって組

織され、昭和 2 年には佐々木節郎が菱沼美仙を受け継いで仙台洋画研究所を再興した。

自由画運動は大正 7 年(1918)に山本鼎が郷里長野で起こしたが、同じ年に宮城県では細目為が学校教育で行われていた臨画に対し連想画を主唱していた。彼はまた自然を見つめ写生する自由画運動にも共鳴し、山形寛らと本県でこれを実施し、自由画展覧会も開催した。

昭和の時代になると、美術の大衆化は進み、東京での帝展、太平洋画会などの公募展に出す人もふえた。宮城県でも大型の展覧会、東北美術展が昭和 8 年に生まれた。県知事らの著名人に加えて太田正雄(木下空太郎)、児島喜久雄らの大学人が関係したのは学都仙台らしい。また河北新報社が社主一力次郎の意向から同展を支え、「東北の仙台」の意識が強められた。本展は河北美術展として今日に受け継がれている。

河北展は地元の知識人が顧問として関わり、安井曾太郎、前田青邨ら当時の画壇を代表する作家が審査員をつとめた。そのこともあって河北展は本県美術界の中軸になり、その入賞や入選が多くの人たちの目標になり、登竜門ともなった。『河北新報』によるジャーナリズムも後押しして、美術の普及や底辺の拡大に大きく寄与した。

工芸活動は昭和 3 年(1928)の県商工会議所による東北産業博覧会が開催されて、伝統的工芸の部門、漆芸、竹細工などが注目を浴びた。同じ年に商工省仙台工芸指導所が設立され、玉虫塗りなどに新工芸の発案が見られた。昭和 8 年(1933)に東京で同所の展覧会が開かれ、それを見たブルーノ・タウトがその年の 11 月から 4 ヶ月仙台に滞在し、〈見る工芸〉から〈作る工芸〉への問題提起をおこなった。ここで研究をしていた剣持勇や豊口克平を通じて、彼の影響が少なからず工芸の近代的方向を進めることになる。なお同指導所は昭和 15 年(1940)に東京に移り、仙台のそれは東北支所となった。

戦後の美術活動は、新しい傾向として戦前の前衛を仙台で興す気運が高まった。昭和 21 年には芸術の全分野の活動が始まり、河北展も再開されたが、総じて河北展は戦前のシステムを残したままで、新時代に対する自覚や反省はあまりなかったと言える。昭和 23 年には新東北美術協会が誕生した。

昭和 25 年(1950)にサロン・ド・メイが東京で開催され、この地にも影響は及んだ。また新しく結成された新現美術協会や、宮城輝夫を中心にしたエスプリ・ヌオーヴォや東北現代連盟展が活動した。前者は機関誌も発行した他、大学人、村田潔、三井滉、西村規矩夫らが新しい表現活動を志向して積極的に支援した。それは戦前の大学人の関与を思い起こさせる。後者は山形や岩手の新しいグループと連携し、仙台、山形、盛岡などの他、東京の制作者会議とも展覧会を開いた。

新しい美術との接点という点では、昭和 39 年(1964)にアンデパンダン展が開かれる。仙台市も市制 70 周年の記念事業として主催に加わった。これに参加した宮城輝夫らのそれまでの活動のおかげもあって、東京、山形、盛岡などから、地域を越えた出品があった。前衛的、ダダ的な傾向作品もあったが、保守的傾向のものもあって、次につながる現代的な創造活動にはならなかった。同年に宮城県芸術協会が成立し、県芸術祭を担当し、今日まで継続している。芸術協会の署名活動をひとつの梃子として、県立美術館が数年にわたる設立準備を経て開館するのは昭和 56 年(1981)のことである。

1970 年代以降、仙台でもデパートの美術部や商業画廊以外にも企画画廊がいくつか

あって、地域の美術活動を支えてきた。しかし、後のシンポジウムで述べるが、これまで休止することなく活動を続けてきたギャラリー青城も閉じることになった。ここ四半世紀のこの地での企画画廊の変遷は、県の美術状況の一端を象徴しているだろう。これまで企画画廊はオーナーの美術表現に対する批評性を反映し、その活性化をはかってきた。これも消えて、新しい表現や美術家を育てる土壌が痩せていることの一つの証左でもある。地元新聞には専門の美術記者がいないし、美術ジャーナリズムによる時評もない。総じて地域の美術活動を見守り、批評し、支援する言説がない。しかし新たにいくつかの NPO 団体による芸術をめぐる連携が生まれてきている点は救いである。

.....
.
〔シンポジウム〕 「地域の美術工芸活動 - 現状と展望 - 」

パネリスト：山形美術館館長 加藤 千明氏

宮城県美術館学芸部長 西村 勇晴氏

福島県立美術館学芸課長 早川 博明氏

福島県立博物館主任学芸員 川延 安直氏

司会：東北芸術文化学会会長 齋 藤 稔氏

趣旨

東北芸術文化学会会長 齋 藤 稔

東北芸術文化学会は今年満 10 周年を迎えます。これまで学会は会員による研究例会、シンポジウム、コロキウム、鑑賞会や講演会など定期的に研究集会を続けています。その都度、調査研究の発表や質疑応答によって会員相互に、また地域市民の方々と意見を交換し、学術研究の場において思索を積み経験を重ねてまいりました。これも会員と地域の関係機関のご支援とご協力の賜物と感謝しております。

学会はまたその社会的使命から、市民サイドに立った学術的集会が求められています。それは学会が市民と対話する場で、その一つが学会セミナーであります。10 年来地域で研究活動と文化振興に尽力してきた当学会は、市民に開かれた学会というその存在意識から、シンポジウムやコロキウムなど市民との対話あるいはディスカッションを通じて、共通の問題を共有することにしたいとのコンセンサスで行ってきました。

その一環として今回の記念大会は、学会セミナーとして講演会とシンポジウムを開催したいと考えております。テーマは以前から本学会が宿題にしてきました「地域の美術・工芸活動 - 現状と展望 - 」です。可能なかぎり新しい成果を問うことにしたいと思いますが、多くは＜自由な話し合い＞をベースにして気軽に進めてみたいと望んでいます。ただ問題の設定として、2 点だけ、対象と視座についてあらかじめおきたいと思います。

1. 対象：テーマの「地域の美術・工芸活動」について、対象とする地域は東北地

方、主として東北の南三県に致します。しかし内容や課題の関連から必要に応じて北三県にまたがり、国内や国外との対比や比較も加わることも生じましょう。また時代はこの現代を中心にしますが、当然歴史的なつながりから近世や近代にさかのぼって追求する必要もでてきましょう。ポイントとして「いま・ここ」の人間生活を、社会や文化、自然や環境をも視野にいれながらテーマに即して主題化していければよろしいかと考えております。

2. 視座：「地域の美術・工芸活動」に関して、ここで言う活動は地域において美術・工芸を網羅する現今の造形芸術の諸領域にまたがり、それら諸領域の制作や表現、鑑賞や批評、研究や教育を含む芸術活動全体をさします。とくに今回はそれら活動全体を総合的に把握する観点から、その社会的関連を問題にすることにしたいと考えます。それゆえ美術・工芸の収集と展示を主要な役目とし、それらの社会的機能と作用が現代においてますます重要性を増している美術館および博物館の社会的な活動を主にして扱うことに致しました。たしかに造形芸術の総合的活動を重点的に把握するとすれば、社会的活動に力点をおいているミュージアム（美術館と博物館の両者をさす）を主題化することが了解されます。

その活動の最大の効用は社会的コミュニケーションの多様な機能です。現代的には市民社会との有機的な関係を維持すること、これとともに美術・工芸の商品市場の活性化と批評活動の向上が求められます。これら問題点も論議されることが期待されています。言い換えれば、一般に行われている美術館・博物館活動を問題にすることで総合的な造形芸術活動が、個々の領域の追求とともに顕著に浮彫りにされることになりましょう。

「地域の美術・工芸活動」の社会的統合について付言します。美術館と博物館は総合的な造形芸術活動の社会的役割の集約の場です。すなわち多種多様な制作や表現の到達点であり、収集作品の鑑賞や批評に奉仕する拠点であり、美術工芸の様式や解釈の研究（作品や作家など）の学芸的作業を推進し、また広く社会教育を担っているシステムから美術教育を行う融合点であり、そうしてそれら統合の場を形成しています。

それに加えて、美術館や博物館は本来的に造形芸術としての美術・工芸活動を背負って機能する社会的な文化施設（インスティテューション）の機能的性格から、近代的な意味で社会の制度として、また機構としてその特性を備え、社会文化の力学を支えています。何よりもミュージアムにおける美術・工芸作品の展示・陳列は造形芸術の総合的活動の意味からその作用と意義を当初から受け持っていることで、その社会的機能を発揮しています。その最大の効用は社会的コミュニケーションの多様な機能を担っていることです。

そのような観点から今回は美術館と博物館の学芸の専門家に登場をお願いした次第です。しかしシンポジウムではコミュニケーションの視点にこだわらなくてもよろしいと思っています。これは内在的な問題としてミュージアム活動に組み込まれているからです。

満 10 周年の節目に、以上のテーマを共有しつつパネリストの発表に耳を傾け、会員また地域社会の関係の方々とともに話合いや討論や質疑応答によって問題を深め、新たな課題と成果を導くことにしたいと希望しています。また現状を分析しこれからの展望をはかりながら、あるべき可能態を探ることにしたいと考えます。これがこの企画の目標であります。学会セミナーでの討論や対話の機会によって、つまり市民たちの言説を通じて学会が地域社会と連携し、学術的な調査研究と文化振興に、また社会的な貢献として生活文化や芸術文化などの分野の活性化に尽力することができれば幸いと思っております。

[パネリストの要旨]

山形における美術工芸の活動と美術館の役割

加藤千明

1. 山形県内美術館の特色と課題

山形県では他県に先駆けて美術館が開設された。1932年に東洋陶磁器を集めた掬粹巧館（川西町）が財団法人として誕生、東京以北では初の私立美術館である。戦後になると47年の本間美術館（酒田市）をかわきりに、50年の致道博物館（鶴岡市）、51年の蟹仙洞（上山市）と次々とオープンしたが、いずれも大名家や資産家が蓄積してきた美術品や文化財を展示公開する私立の施設。その後、本間や致道では、地域との結びつきをはかり企画展や地元の美術団体展、個展などの展覧会活動を行ってきた。県都山形市に山形美術博物館（現在の山形美術館）が開館したのが64年。設立の主な目的は、戦争直後に生まれた山形県美術連盟と山形新聞社が主催する県美展の会場確保であり、日展や院展などの大規模展の開催であった。運営は新聞社主導の財団法人による私立美術館であるが、これまでと異なり美術品を所蔵しない、ギャラリー的機能のみの出発であった。とはいえ、まだ地方都市に本格的な美術館のない時代であり、大原美術館展や松方コレクション展などの開催は多くの県民に歓迎され、また県出身作家や地元所蔵家の協力により収蔵品も次第に増えていった。

1978年、ミレーの「種まく人」が話題となった山梨県立美術館が開館すると、全国に美術館建設ブームが巻き起こり、来年オープン予定の青森県立美術館ができあがると、都道府県立的な規模と内容をもつ公立美術館がないのは、全国で山形県だけとなる。美術館の先駆的な県であったが故に、逆に最後の県となってしまったという奇妙な現象が生じた。県内にも確かに90年に天童市美術館、97年に酒田市美術館ができ、今年8月には鶴岡アートフォーラムがオープンするが、それらは各地域に立脚した公立の美術館、ギャラリーであり、県全体を視野にいたした美術資料の収集と調査、創作活動の支援、さらには情報センターとしての役割を担う拠点館が存在しないという欠陥を抱えたままである。山形県の財政状況から、文化施設を含む全ての箱もの建設が凍結された現在、県立美術館なり県民ギャラリーの創設は望めない。今後、こうした課題の解決に必要なのは、新規施設に頼らない県内の美術館（私立・公立）

相互の緊密かつ有機的なネットワーク作りとそれを支える県としての人的、財政的な取り組みではないだろうか。

2．美術工芸の創作活動

戦後の山形県において創作活動の拠り所であり発表の場であったのが県美展であることは否定できない。敗戦直後の混乱した状況の中、文化復興への熱気は驚くほど高まり、46年1月には山形県美術家協会（現在の山形県美術連盟）が発足し、6月には第1回の県美展が開催された。初期の県美展で受賞を重ねた作家の多くはその後に上京して中央の美術界で活躍している。このように県美展が中央と連動していたのは10年間ほどで、60年代以降は県内在住作家による県レベルの美術の祭典として定着する。出品作家をジャンルごとにみると、洋画と彫刻は、山形大学教育学部美術科卒の教員で中央の団体と併せて県美展にも参加するセミプロ作家と純然たるアマチュア作家で構成され、日本画では、戦前からいた地方絵師の流れの作家がこれに加わる。工芸では、山形の地場産業である銅町の鋳金家や窯場をもつ陶芸家といったプロ作家が多いのが特徴である。一方、県内の高校から東京の美術大学に進み、中央であるいは海外で創作活動を展開している作家も多いが、地域としての美術工芸活動とは疎遠であるといわざるをえない。

3．東北芸術工科大学の開学と未来へ

1992年、東北北海道で初の美術系大学として東北芸術工科大学が開学。今では2000人の学生が山形の地で学んでおり、若者の流出に悩んでいた地域の活性化に大きな期待が寄せられている。卒業生、在学生の活躍も目覚ましく、中央での公募展、コンテスト、コンペなどで入賞・入選を果たしている（一例、今年3月、損保ジャパン美術賞を洋画コースの4年生が受賞）。しかし、県美展や地元の美術団体とのつながりはほとんどなく、会員の高齢化の進む各団体は切齒扼腕している。こうした現状に少しでも風穴を開けるべく美術館では、山形県出身者、県内在住者、東北芸術工科大学関係者をひとくくりにした中から、新しい表現に取り組んでいる作家を発掘・紹介する企画として「生まれるイメージ展」をこのたび開催し、今後とも継続していく方針でいる。

工芸に関しては、地場産業である銅町の鋳物において伝統的工芸品の需要の低迷からモダンデザイン、クラフトアートへの転換が求められており、平清水の陶芸においても後継者難や陶芸ブームの終焉による窯場の廃業が問題となっている。東北芸術工科大学には工芸コースやプロダクトデザイン学科もあり、卒業後の進路や創作活動の選択肢のなかに、地場産業への参加とその革新への取り組みがあってほしい。こうした若い作家の山形定着のためには、同大学における鋳金の教授陣配置と設備の充実、また地域的にも隣接している平清水との協力と、将来的には「工芸の郷」のようなゾーンの形成が望まれる。

地域の美術工芸活動 現状と課題～宮城県～

西村勇晴

この夏、仙台で一人の画廊主が経営から手を引く。この画廊、ギャラリー青城は版画専門の店として出発したが、近年では版画だけでなく、仙台では数少ない多様な美術表現の発表の場でもあった。私が宮城県美術館の建設準備室に来た1978年以降、仙台でもデパートの美術部や商業画廊以外にも、いわゆる企画画廊がいくつかあった。その頃から現在でも休止することなく活動を続けてきたのが、ギャラリー青城である。同画廊は経営者が変わり存続するが、おそらく企画画廊としての性格はオーナー次第で変わることだろう。仙台ほどの人口規模であれば名古屋の半分とはいわないまでも、企画画廊がいくつかあっても良さそうなものだが、数少ないそのひとつがなくなろうとしているのである。ここ四半世紀のこの地での企画画廊の変遷は、当県の美術状況の一端を象徴しているかもしれない。

企画画廊はその性質上、オーナーの美術表現に対する批評性が反映され、そこで展示された作品を買う顧客は、一方でその作家を支えるという側面をもつ。一般の人々が買いやすい、商品としての美術品を扱うデパート美術部や商業画廊はともかくも、新しい表現や美術家を育てる土壌がここでは痩せていることの一つの証左でもある。

さらに、批評という点では、1950年代には大学人が地域の美術と関わり、作家と交流し、また美術批評をしていたが、現在ではそれもない。幸いにして若い人たちが作品を発表する場はあるのだが、地元新聞にはプロパーの美術記者もおらず、またそれに代わる機関誌もなく、地域の美術を見守り、批評し、支援する言説がないのである。救いなのはこの現状を打破しようとして生まれたNPOの団体がでてきたことだろう。だがこれらをも支える市民が多く出てくること、それが宮城県の美術界の課題だろう。

福島県立美術館と地域との関係

早川博明

美術館運営の基本的な機能である作品収集、展示、保存管理、調査研究、教育普及の観点ではなく、下記の項目立て（カテゴリー）にそって、美術館と地域との関わりを明らかにしたい。

1．文化行政

(1) 県展（福島県総合美術展覧会）

長い歴史をもつ県展との関係は、地域の美術館にとって古くて新しい課題を投げかけている。当館は、県展を会場問題ではなく質の問題として一定の距離をおきながら関わってきた。県展依頼出品者の中から各部門（洋画・日本画・彫刻・工芸・書）1名に「県立美術館長賞」を授与し、中堅以上の出品者の奮起を促している。

2．機関

(1) 市町村自治体

県の立場から県内市町村の美術文化振興活動に貢献する。例えば美術館の運営収集に関するアドバイス。公民館等の活動への講師および事業提携。

(2) 学 校

「美術館・学校連携協議会」を主催し、会議、講座、共同ワークショップなどの事業、鑑賞用補助教材の研究開発と啓蒙など、多角的な側面から児童先生と美術館とのパイプ強化をはかっている。

(3) 友の会

一般市民が美術館事業をめぐって主体的に鑑賞などを深める活動を支援する。

(4) 報道機関

展覧会事業などを共催（実行委員会組織）でおこない、地域との密着をはかる。

(5) 民間企業（協力会）

美術館協力会を設立し、地域の文化活動に貢献する企業の参入をうながす。

3．人

(1) 鑑賞者（利用者）

美術館を専門機関としてだけではなく、日常生活の中で親しみを深めてもらうための仕掛けや教育普及的な諸事業をすすめている。サンデートーク、ギャラリートーク、鑑賞講座（美術館入門-これであなとも学芸員）、館長特別講座などの講座物。ミュージアム・クリスマス、友の会・協力会との共催によるコンサート、パーティ開催。

(2) 作家（出身者など）

地域の美術文化を育成するため、美術館が主体的に作家と関わる。「福島の美術家たち展」「福島の新世代展」「New Spirits 福島」展などの企画展、物故作家や有力作家の回顧近作展開催。ワークショップや普及事業への講師参加を依頼し、市民とのコミュニケーションを促す。

(3) コレクター等

福島県の場合、近現代美術を対象とする民間コレクターの層が浅く、関係を結ぶ機会をもつのが難しい。それ故、県外に所在する作家遺族やゆかりのコレクター、まったく新規のコレクターとの関係を築き、調査研究、作品収集、展示会開催などの活動をすすめる。

4．もの

(1) 所蔵作品紹介

広域の県民を対象とすることから、「移動美術館」を県内各地の公的文化施設で開催し美術館所蔵品の鑑賞普及をはかるとともに、各施設の改善などの助言もおこなう。

（年1回）

(2) 所蔵作品交換展

隣接近県の美術館との所蔵作品交換展を企画し、相互の特色あるコレクションにより親しみ、新しい発見を鑑賞者にうながす。（新潟県立近代美術館展を実施済み）

5．今後の展望

広域を対象とする県立美術館の場合、地域との関係を築くためには様々な課題がある。県内市町私立美術館との関係を深めながら、美術館活動を総体的に活性化するた

めのネットワークづくりの輪を広げ、市民の活発な利用をうながすための施策が今後ますます必要となってくるだろう。

福島県立博物館と地域の関わり

川延安直

1. はじめに

来年で20周年を迎える福島県立博物館は会津若松市にある。この地域は、江戸時代は23万石の会津藩の城下町として栄えた。しかし、ご存知の通り幕末の戊辰戦争により城下町は多くが焼失し、文化の担い手の中心でもあった武士層は下北半島などにかば強制的に移住させられた。

現在、歴史的な観光地として全国的に知られているが、文化的土壌は一部で断絶している。そのような、不幸な歴史の一面がある反面、文化的・民俗的伝統が残っている。しかし、そうした伝統も過疎化、高齢化、産業の空洞化の中で新たな存続の危機を迎えている。

2. 調査研究

博物館の活動は大きく調査研究と展覧会活動、普及広報に分けられるのが一般的だが、もちろん展覧会活動は調査研究の上に成り立つものである。福島県立博物館の展覧会活動は福島県内の資料調査の成果をもとに組み立てるやり方が主流となっている。テーマも多くは福島県内の事項から取っている。「古い」のような地域性を超えた大きなテーマの際も、できるだけ地域の資料を取り上げる。

3. 普及広報

普及とは教育普及活動を指すが、福島県立博物館では3年ほど前から学習支援の呼称を用いている。学習支援については次に別項を設ける。広報活動は現在のところ最も弱い活動であろう。県の広報網に則った配布先に広報資料（ポスター・リーフレット）を送付する方法は、広いPRには限界があり、「博物館は何をやっているのか分からない」と常に広報不足を指摘される。地域との関わりを深める上で大きな問題点である。

4. 学習支援

学校の週休2日、総合学習の導入により、主に小中学校の体験学習を支援するために体験学習メニューを用意している。原始古代の火起し、勾玉作り、近世の度量衡理解のための桁での計測、化石標本作りなどであるが、最近は学校へ浸透したためか週に数団体と利用が増えている。さらにメニューの増加を計画中である。

また、開館以来、福島県内の伝統技術保持者を招き、実演・実技講座を開催している。近年、実演を観覧する方が実際に体験を希望することが多くなってきたため、実技講座の割合を増やしている。最近の例では、漆の技法体験、須賀川の絵幟、会津本郷焼のにしん鉢などを行った。いずれも20人程度の定員を超える申し込みがあった。

今後は流し雑をテーマに体験講座と民俗学の講座を融合した新たなタイプの講座を考えている。

生涯学習へのニーズの高まりと、高齢者の学習意欲が明らかに見て取れるのが古文書講座の人気である。同講座は地域の歴史に関する古文書を解説するものだが、30名の定員は埋まり、友の会有志によるあらたな勉強会もスタートしている。地域史への関心と読めなかった文書が読めるようになることの楽しさが味わえるのが人気の理由であろう。

5. おわりに

今春に開催した「古い」展では、一般的な講演会をはじめ、パフォーマンス、能公演、映画上映会などを展覧会会期の前半に集中的に行った。展覧会観覧者の低調さに比して、いずれも多く参加者があった。

特に、福島県三春町の作家玄侑氏の講演、当館の地元会津若松の会津能楽会とやなぎみわ氏による公演は200名近い観覧者が訪れる盛況であった。こうしたイベントへの人気は地域の人々の博物館への新たなニーズを示すものであろう。

地方博物館は地域の歴史文化を単に調査研究するのみではなく、地域の文化をその地域に広く紹介し、地域の文化力をより活性化することが求められているのではなかろうか。そのための一助として、地域文化の全国への発信、また他の地域、中央の文化との協同の仲介を進める必要が今後高まることと思う。

.....

パネル・ディスカッション：

司会者がシンポジウムの趣旨を簡略に述べた後、各パネリストからそれぞれ15分づつ上に提示した要旨によって発表してもらい、それを受けてパネル・ディスカッションを行った。そのポイントは3点に集約できるだろう。

1. 地域の美術工芸活動と大学との関係について；

加藤氏は山形市の東北芸術工科大学の在学生と卒業生の制作活動がめざましく、とくに中央での各種絵画展の入賞や入選などを紹介した。これに対して、他のパネリストの質疑応答があった。因みに、仙台では宮城教育大学や私立大学ではあまり多くなく（西村氏）、それは福島の大学でもほとんどない（早川氏）。山形の場合も、大学の学生や教員らが美術館の社会的機能としての創作に直接に関与することはなく、地元の県美展や美術団体への関連も少ない。また山形の地場産業である鑄物の活動を支える面から、今後の見通しとして大学における工芸コースのなかに鑄金の専攻設置、また「工芸の郷」の実現への期待が語られた（加藤氏）。

2. 美術館と地域の美術工芸活動との関係について；

1) に関連して、各市の小中高校への関係について、校外活動としての出前講座（加藤氏）やワークショップや鑑賞講座（西村氏、早川氏）、学習支援（川延氏）

などの活動、鑑賞指導などが断片的に提示されたが、学校における美術工芸教育を社会的に支える注目すべき例示として、会津の宗像焼展（早川氏）、書道展（加藤氏）が紹介された。とくに絵本（原画）展（西村氏）は収集が世代を超えて創作と鑑賞を結びつけ、美術館の有益な事業となっている。また福島の場合では広域にまたがる市町村自治体の学校のために創作講座があり、また鑑賞教育として、例えばアート・キューブの補助教材を貸し出し美術館の作品とアクセスさせて具体的な効果を与えていることが報告された（早川氏）。

3. 地域の創作活動と美術館の関係について；

「アートみやぎ」は3年おきに行なわれ、宮城県の創造的な方向性を示している。また1964年に宮城県芸術協会が設立され、県の美術展を運営している。それ以降、油絵、日本画、諸工芸を含む領域の主体的な市民運動の側面もあり、いろいろと変遷をとげているものの、今日では会員だけの批評性の低い活動となっている点は否めない（西村氏）。

福島県では県展に会場を提供しているが、県展依頼出品者の中から各部門（洋画、日本画、彫刻、工芸、書）1名に「県立美術館長賞」を授与する方式を行なって、美術水準の向上をはかっている。これは古い新しい試みでもある、と（早川氏）。

山形県では、東北芸工大出身者を含め地域の若手作家のために、新しい企画として「生まれるイメージ展」を今年開催して反響をよんでいる（加藤氏）。

ディスカッションの全体から

パネル・ディスカッションを受けて、フロアーとのディスカッションに移った。ここでは上述の要旨、パネル・ディスカッション、そしてフロアーとの質疑応答によって引き出された問題点を整理して、重要な観点を次の5点にまとめることにしたい。とくに、社会文化の視点から取り上げるとすれば、必ずしも討議されなかった点の補いも含めて、次の諸点を述べなければならないと考える。地域の創作活動とミュージアム、文化的ネットワークの形成、批評ないし評価の介在、美術工芸活動と教育、社会的コミュニケーションなどの問題である。

1. 地域の創作活動への関わり

1) 地域の美術工芸の制作活動に関して、ミュージアムが地域の作家の制作作品を展示することを役割とする場合と、そうでない場合があることが、明らかにされた。宮城県美術館は貸画廊的な役割をもたず、独自の収集作品の展覧と特別展を積極的な役目としている。山形美術館は県美展の展覧会の会場提供として、また日展や院展などの大規模展の開催を引き受けてきた。

福島県立美術館は独自の収集作品の展覧と特別展を行う一方で、県展との関係は、会場の提供だけでなく、制作の質的向上の点から一定の距離をおいて関わってきた。すなわち、県展依頼出品者の中から各部門（洋画・日本画・彫刻・工芸・書）1名に

「県立美術館長賞」を授与し、中堅以上の出品者の奮起を促している。これは地域の美術館にとって古くて新しい課題を投げかけている、と早川氏は強調した。

加藤氏は中央や海外で創作活動を展開している作家も多いが、地域としての美術工芸活動には疎遠になっていること、また東北芸工大の出身者も、県美展や地元の美術団体とのつながりはほとんどなく、会員の高齢化の進む県内の各団体が危機的な状態にあることを伝えた。

宮城県は県サイドの美術振興のために、県芸術祭美術展を宮城県芸術協会に委嘱し、そこに丸投げしている形である。例えば県が発行する宮城県芸術年鑑は作家のもとで編集されているので、作家の自由裁量に任されている、という次第について西村氏が述べた。

美術工芸における創作活動は鑑賞や美術教育も含めて、総じて美術を楽しむ気運を作るゆえに地域全体で活性化されなければならない。これは一美術館だけではできないので、行政や企業や民間が協力してなされなければならない性格のものである。この指標はパネリスト 4 人の共通の念願であり、現在から未来への展望においてこの点への対応が強く求められたと見られる。

2) 上の問題点に関連して、芸術文化への公的支援と民間協力、そのシステムについて、文化政策の面からの対応が行なわれてしかるべきであろう。

国立の機関はここでは別となるが、県立とその他の公立の場合に、公的支援とそのシステムは欧米とちがって地方行政の財政的援助は極度に低い水準になっている。国立の場合も欧米に比べるときわめて低いが、これは公共文化財に対する考え方や市民の関心の希薄、つまり需要サイドの意識の低さなどによっている。それ以上に問題は行政による非営利部門への財政的補助や支援である。この後進国的な対応は日本に文化経済学や芸術社会学などの学術研究が遅れていることも要因にあげられる。それを含めて芸術文化の社会的な役割への認識が欠如していることにある。

芸術文化は非営利部門の最たるものかも知れない。しかし欧米のように、日本の行政も芸術文化が社会的機能として市民生活を活性化し、コミュニティを支え、コミュニケーションをはかる重要な分野であることを次第に認識してきている。これは地方の分権化が全般的な潮流となり、文化的インフラストラクチャーが次第に整備されて、各都市が自立的な発展をすすめる、各地域も自立的な形成を意図している、例えば都市計画や環境形成に関連して創造的な街づくりを推進していることにみられる。

そのような情勢において、各芸術文化の機関や団体が行政に対して財政的支援や補助を求めていくことは必須であるが、当然その活動のための諸条件の整備や諸行事の充実をはかるプログラムやプロジェクトを計画して、その可能性と意義について訴える必要がある。他方で、利用者の受容をできるだけ多くする鑑賞や消費を高めることに努めることが求められる。芸術文化の部門ではつねに集客率が問われることになるのも、行政がつねにその数値にこだわっているからであろう。

芸術文化は生活文化を含み地域社会の文化的アメニティやコミュニケーションのつながりを生み出す最良の精神的指標である。とりわけ大衆文化がますます広がり、しかも低俗化する傾向にあるときに、それとは異なった特性を維持することの文化的使命を認識していなければならないだろう。芸術文化と生活文化の区別ができない新たな

なジャンルのものもあり、生活の芸術化や芸術の生活化の現象も多く見られるようになった。もちろん大衆の現実的な趣向を前向きに把握しつつ、またその文化的広がりにも注目しつつ、大衆文化のもつイベント性やエンターテインメント性の特徴を考察してみることが求められている。

このことについては直接的には語られなかったが、各パネリストの要旨に暗示されている。手短かに挙げれば、山形において将来「工芸の郷」のゾーン形成（加藤氏）、NPOのような団体の設立（西村氏）、移動美術館の実施や美術館活動による市民たちの活発な利用の促進（早川氏）、展示会に合わせた講演会や能楽上演へのニーズ（川延氏）など。

山形県美術館は県内作家に対応している。県内書道展、高校生の書道展にも対応し、県内レベルの創作活動を援助している。これは財団美術館の特性を發揮している点である。なお東北芸工大学が山形市にあるが、学生は仙台で展覧会を開き、河北展に出品し受賞をねらっている（加藤氏）。

なお、県立美術館をもたない山形の例が、独立法人化へ移行するこの時代に、ある意味で先行していて、規模の小ささや組織の違いがあるにしても、欧米なみの民間による文化支援の日本の先鞭であったことを考えさせることになるかどうか、この点は残念ながら議論にならなかった。

この項目の最後に、公募展を含むミュージアムと地域の作家との関係について主要な諸点をあげておきたい。

『みやぎの5人展』『アートみやぎ』などの展覧会を開催し、地元作家との関わりも模索している。しかし地元の作家の絶対数が少なく、取り上げるべき作家も限られ、ノミネートされた作家は順番待ちの状態である。また美術館アトリエでワークショップや公開制作も企画している（西村氏）。

『柳宗悦の民藝と巨匠たち展』を開催し、地元作家とのチャンネルを重視している（早川氏）。

博物館という性格から、物故作家と工芸品を多く取り扱うとともにコレクターの支援を受けている（川延氏）。

地元の作家約3000人とのつながりがある。県レベルの美術展の面倒を見ている。県民の美術活動のための美術館の性格が濃厚である。学芸員2名を含めて計11人で運営しているが加重労働である（加藤氏）。

宮城県美術館は宮城県芸術協会の署名運動から発した。ただし美術館は貸し画廊ではなく博物館であり、批評性を持っている。公募展や会員展は他で開催して欲しい。当館で行う『みやぎの5人展』『アートみやぎ』は批評の観点を持って行った（西村氏）。

かつて県展は地域文化振興の役目を果たしていた。しかし地元美術界のヒエラルキーを作り維持する機能の方が、最近では目立ち始め、30、40台の美術家が入る余地はなく、彼らにとって魅力を欠いている。彼らが奮起できる展覧会に構造改革すべきである（早川氏）。

河北展も東北6県を中心として審査方式で行われているが、地方における一つの權威となってしまう、作家を殺しているとの見方もある（西村氏）。

終戦直後の県展は作家を生み出し中央に送り届けるなど大きな意味を担っていた。しかし県展の無鑑査制は高齢化を助長するなどして弊害が多いので、それら県展独自の古い制度をやめるべきである（加藤氏）。

ミュージアムと地域の作家との関係について重要なことは、美術館や博物館は何よりも、良い制作活動をしている人達を生かすべきであるという点である（川延氏）。

2. 文化的ネットワークの形成について

美術工芸活動を社会的な文化運動として有効に進めるために、公的私的な文化的ネットワークを組み立ててその有機的な連携を保ちつつ協力して活動することは、いくつかの分野で行われていて、イギリスやドイツ、北欧などにはその先例がある。私もケルンやハノーヴァの例を見て知っているが、欧米における事例から、日本でも都市の文化的発展にとって大切なのは、様々な分野や領域におけるネットワークであることが行政の側もだんだん分かってきている。

とくに多くの文化分野の中で芸術文化はその本来の美的文化の性格からネットワークを組みやすいと言える。しかし日本では美術工芸の芸術文化の分野がもっとも遅れているという皮肉な現状も認めなければならない。それは市民社会における芸術文化の重要性について、コンセプトがあまりなく、またその社会性に関する認識が不足しているからである。

とくに、中央でも地方でも行政が文化政策や文化支援に対する思慮を欠いていることが大きな要因になっているからである。もう一つはネットワークの組織や仕組みを担う機関が明確でなく、また指定されず、またそのイニシアティブを取れる機関もないことによる。行政がその役割を受け持つ可能性はほとんどないと言える。そうになると、公立私立を問わずミュージアムが中心になることが求められるかもしれない。なぜなら、芸術文化の社会的な活動を総合的に扱う機関だからである。しかしながら、学校や大学をはじめ、様々な文化施設、各美術団体とそこに属する個人、画廊、芸術文化の事務所や研究所、愛好者の団体や会、企業など、これら諸団体諸機関を統合する仕事を一ミュージアムに委託することは不可能であろう。一部で、専門的な分野の大学や研究所、また学会が初めの個人的な繋がりから、擬似的なネットワークの介在をして仮設的な存在を生んでいるところもある。

今回のシンポジウムでは、加藤氏が山形県内の公立市立の美術館相互の緊密かつ有機的なネットワーク作りとそれを支える県としての人的、財政的取組みの必要性を望み、早川氏が同じく県内の公私立美術館との関係を深めながら、美術館活動を総合的に活性化するためのネットワークづくりの輪を広げることが要望した。また西村氏が地域の美術活動を支えるNPOの団体の待望を語ったが、美術活動の現状を打破するために、異口同音に市民サイドのネットワークの働きに期待している。博物館の立場で川延氏は地域文化の発信が中央や他地域との協同作業に発展し、その仲介を進めることが期待されると述べて、その協同作業がネットワークの仲介を示唆したように思

われる。

四氏が語ったことに関する対応として、一つにはネットワークを支える公的支援に重要な〈カネ〉の問題があり、もう一つには市民サイドの諸団体や諸機関をまとめる作業をどの機関がやるか、誰が担うか〈ヒト〉の問題がある。

このネットワークがよく機能している都市の例がある。例えば広島では戦後間もなく被爆から蘇生し平和を希求する市民運動に結び合った美術活動が起こり、次第に中央に本部をもつ美術団体の支部以外に、地元の美術グループが数団体設立されて今日の活発な創造活動に結びついている。その中で注目されるのは、1982年に設立された広島芸術学会である。実は私が広島大学に赴任してから学部内外の同僚とはかつて間もなく結成した芸術文化の学術団体である。それ以降同学会は学術的な調査研究を主たる事業活動としながら、各大学の関連研究機関や教員、地域の美術団体、研究所や任意団体、また市民の愛好者たちに呼びかけて、今や会員300名の学術団体になっている。そして何よりも芸術文化のネットワークを有機的に推進する中心的な役割を演じている。また同学会は『広島の美術』の図録編集、美術コンクール「広島グラント大賞」の審査などに積極的に関与している。これらの事業は広島県と広島市の関連団体が行っているが、これはネットワークに行政が間接的に参与していることを示している。ドイツ(ケルンやハノーヴァ) またイギリスやデンマークなどでは直接的な参加が普通に見られる。今後、東北の地域でも、直接的に間接的に、とくに小都市から始めることで、その可能態が開かれているように思われる。

このようなネットワークを維持するために必要な要件として、1)その構成にできるだけ多くの各文化施設や団体が加わり、2)それを継続することが求められる。また3)直接的に間接的に、行政の公的支援が欠かせない。4)加えて他都市との交流を通じて外部のアイデアやコンセプトを受け入れて、比較や対比による改革や変容を批判的に進めることが大事である。そして5)に市民サイドに根ざした学会や協議会のような自主的自律的な団体の存在である。今日ではNPOのような非営利組織がある。当然専門性と創造性をもった能力が求められるだろう。

この点で東北芸術文化学会は設立10年以来、積み重ねられた思慮と経験からその役割を担う用意と可能性がある。すでに山形市でまた仙台市で、具体的な活動をしており、今回のシンポジウムもまさにそのコンセプトで行われたわけである。われわれはその意味で、今後もそのようなネットワークを構成し、また各芸術文化団体とも連携を作り、また各行政機関ともコンタクトをもって進めていきたいと考えている。

なお、宮城県美術館がその活動に参画するNPOのことについて西村氏から紹介されたが、活動はこれからのようである。もちろん、われわれの学会はそのようなNPO組織ともできるだけ連携を保って活動していくようにしたいと思う。文化領域での連携、縦の繋がりだけでなく、より活発な横の繋がりネットワークとして美術工芸活動を活性化する必須の要件となることを強調する。

以上のように、ネットワークは個人の問題ではない。また各々の行政やミュージア

ムや研究教育機関、あるいは作家や専門家や愛好家など個々の問題でもなく、それらを繋ぐ各機関の組織的問題である。NPOのような存在で、それらをまとめて有機的な関連におく機関が問題になる。

なお、美術館創設に際して、山形市では山形新聞社はじめ民間協力の力量が預かって力があつたと見られるし、仙台市では、県立美術館の設立前から、東北大学の美学美術史研究室の教員も参加して市民サイドの芸術活動の支援があつたことが、シンポジウムの前の西村氏の講演から示された。

3. 批評ないし評価の介在、その学術的手法の導入

本来、美術活動を制作および鑑賞の両側でポジティブに支えて活性化するのが批評であるはずである。しかし日本では美術活動に関する批評の不在は今日なおはっきりしている。これはこれまでの芸術活動が近現代において一部を除いて社会的に定着していないことを意味している。江戸時代の日本社会では狩野派のアカデミズムに対して、主として作家たちの批評が自らの創作理論に取り入れられたり、またディレクタントイズムを助長する方向に向けられた。文人画にはその様式的展開が見られる。しかし批評独自の発展とはならなかった。それに代わる芸術批評は明治時代以降に自覚され、とくにフランスやイタリアの美術研究と批評が導入されて一時的に批評の時代が到来した。しかしこれも一部に残存しているが、大きな力とならずに現代まで引き継がれている。

これは日本の文化的地盤によっているだろうが、戦後の美術史研究と美学研究が新しい方向を目指したものの、美術批評は一部の特権的な学術的行為になり、美術工芸の実践教育を含む美術教育を顧慮せず、社会的にも大きな作用を果たすことなく、次世代への影響力も余りなく頓挫している状況である。実は批評には美術史研究を含む美学が重要な要件であり、また逆に批評が美学の基礎をなすという伝統的な文化理論があつて、この問題意識が日本では一般に欠けていることを示している。

地域の新聞などのジャーナリズムは時評を行なうが、多くは展覧会を事実として伝えるのが主で、批評と言えない場合が多い。評価を伝えることはあつても、当の作品について体験内容、すなわち芸術的体験や批評的言説などが欠落している。少なくとも作品と作者に関する客観的立場と、批評家自身の見方や思想を強調する主観的立場にたつての記述がなければならないだろう。もちろんこの原理上対立する二つの立場は結びついて、一種の芸術的批評が可能になることが望ましい。

とくに注意しておくべきことがある。今日、中央においても美術工芸に関する真の批評は低落しているが、東北地域においては皆無の状態である。とりわけ現代の美術工芸に関する時評もなく、前衛の活動に関してはその是非を問う問題提起さえも見当たらない。このような状況では地域の美術工芸活動はただ限られた作者の表明でしかなく、ポジティブにせよネガティブにせよ社会的な広がりへとつながることはない。これまでの情報によって知られているように、本来前衛美術はジャーナリズムの活発な批評活動によって現代における社会性を保ち続けてきた。

西村氏は仙台市では今日批評性をもった展覧会が開催されることはなく、地元に関

する問題性をはらんだ創作活動も少ない、と言う。戦後 1950 年代から 60 年代にかけて、東北大学美学美術史研究室の教員や地元の作家たちが協力した美術活動があった。新現美術会展などである。それに関して<批評>という点で、大学人が地域の美術と関わり、作家と交流し、また美術批評を担っていた。しかし現在ではそれすらない。県主導の美術振興では批評不在になってしまうゆえに、創造的な芸術活動はなかなか生じがたい(西村氏)。

今後そのままでは地域の美術工芸活動は決して創造的な方向に進むとは思われない。そのために、批評活動の介在を積極的に進めなければならない。

4 . ミュージアムの教育活動 社会教育としての役割

要旨に記されて討論までいかなかった点で注目したいのは次の点である。加藤氏が紹介した東北芸工大の卒業生と在学生による目覚ましい制作活動が、中央での入賞や入選とともに、県美展や地元の美術団体につながるものが求められることはいうまでもない。その対応として山形美術館が山形県出身者、県内在住者、同大学関係者を対象にして、「生まれるイメージ展」を開催し新しい表現を発掘し紹介しはじめたことは注目される。

また工芸の領域で、一方で伝統的な地場産業でもある銅町の鋳物が需要の低迷からモダンデザインやクラフトアートへの転換が行われ、他方で平清水の陶芸が後継者難や陶芸ブームの低落から窯場の閉鎖が憂慮されているという。このような事情が地元の緊急の問題として、とりわけ地元の大学や工芸関係者によって、新たな展開が模索され、試みられることが望まれるが、1 . - 2) であげたように、その一つに「工芸の郷」という構想は地理的条件に裏付けられて実現の可能性がある。その際、地域の気運を高める情報を作り上げることとともに、ミュージアムがその社会的機能としてその活性化へ指導力を発揮することが求められていると思われる。ミュージアムの教育活動は情報による気運の高まりにも一躍をかうことになるだろう(加藤氏)。

仙台ではこの夏、老舗の画廊、「ギャラリー青城」が閉店の危機に追いこまれた。この都市の数少ない貴重な画廊がなくなっているが、同画廊はオーナーが変わって再開したものの、幾分商業的で一般ごのみのものを扱っていて、内容は変質した。画廊の存在はいうまでもなく、地域の美術工芸活動に関わって市場を動かし、新旧の美術工芸作品の流通を促し、美術館や画廊に対して、また専門家や愛好家のために新風を吹き込んできた。政令都市で仙台市のこのような状況は美術工芸のみならず、芸術文化全体にとって、深刻な問題を投げかけていることを認識しなければならない(西村氏)。

福島県では県立美術館が市町村自治体に対して美術文化振興活動を助け、また学校に対して連携協議会を主催して鑑賞および啓蒙などの指導を行っているが、この連携は将来のために両機関の提携につながることを期待されている。友の会は市民の自主的な活動であり、美術館における鑑賞と研修旅行などが意欲的にすすめられている。その支援も美術館の重要な仕事である。また民間企業による協力会のために関係を強化し始めており、やがて相互の支援や協力関係が出来上がるだろう(早川氏)。

県立博物館は歴史的な観光都市でもある会津若松にあるので、必然的に歴史と自然

が対象になり、そこではそれら各種の教育活動が行なわれている。普及広報は言うまでもなく、小中高の学習支援、例えばレクチャーによる総合講座、もの作りを中心とした実技講座、鯉のぼり作りなどの「博物館で遊ぼう」、そして注目される古文書講座が紹介された(川延氏)。

早川氏が、コレクター等について、福島県の場合も、近現代美術を対象とする民間コレクターの層が浅く、関係を結ぶ機会をもつのが難しい。それ故、県外に所在する作家遺族やゆかりのコレクター、まったく新規のコレクターとの関係を築き、調査研究、作品収集、展示会開催などの活動をすすめている状態を説明した。

とくに現代の前衛美術の創造にとって、学芸員の活動は何をどのようにすべきか、が問われている。これは暗黙の了解であろう。

その問題点を今回のシンポジウムから探るとすれば、次の点が浮かび上がることになる。

川延氏が紹介した福島県立博物館で今春開催した「老い」展に関連して、そこでは一般的な講演会をはじめ、パフォーマンス、能公演、映画上映会などを展覧会会期の前半に集中的に行った。展覧会観覧者の低調さに比して、いずれも多く参加者があった、という。特に、福島県三春町の作家玄侑氏の講演、当館の地元会津若松の会津能楽会とやなぎみわ氏による公演は200名近い観覧者が訪れる盛況であった、という。こうしたイベントへの人気はたしかに地域の人々の博物館への新たなニーズを示すもので、いろいろの余地を与えるものであろう。

地元伝わる文化財を有形無形を問わずに、表現活動の貴重な素材として題材として取り上げること、これは現代の創造的美術工芸の契機となることが暗示された。

この4のトピックに関して、フロアーとの質疑についてここで2件を紹介したい。

蝦名敦子氏(弘前大);いま公募展のトップにいる人たちは、今後におけるそのあり方を真剣に考えている。その流れと思われるが、彼らは教育に眼を向けている。美術館、博物館側がとりもって、作家と子どもたち、あるいは大衆を結びつけるおもしろい教育の場を創り出すことができるのではないか。それぞれ、大変工夫をされていると思うが、教育普及の実態について伺いたい。

この質問に対して、福島県立美術館では、すでに多角的な側面から児童、先生と美術館とのパイプ強化をはかっている(早川氏)。

山形美術館では友の会があり、企画展や常設展を行っているが、そうした作家との教育普及活動というのはとくに行っていない(加藤氏)。

福島県立博物館では、体験学習メニューは登り調子で受講者が増えている(川延氏)。

また、宮城県美術館では、開館以来、教育普及の担当者が4人いて、学校教師を対象にした教育普及の活動にも力を入れている(西村氏)

立原慶一氏(宮城教育大);美術教育に関して、美術館や博物館と大学や高校との関わりについて伺いたい。

宮城県の場合、宮城教育大学と東北生活文化大学があり、宮城野高校に美術コース

があるのみ。地域との関わり合いはあるが、美術館との関わりにおいて特別なものはなく、大学生の美術館利用が少ない点がさびしい（西村氏）。

福島大学との関係はとくにない。美術に関わる学生数が少ない。大学生に期待しない。高校生は最悪である。来館対象者を拡げることが努力目標である（早川氏）。

山形県では、一部ではあるが、美術教師の熱意が感じられる。毎年、文化施設見学として20名ほどの小学生が訪れる。なお、300人ほどの宮城県の女子高生が来館する。また、かつては教育委員会の一声で校外活動を計画し、出向いてきたことがある（加藤氏）。

5. コミュニケーション

美術工芸を含む芸術活動は、芸術が当初から社会的コミュニケーションをその性格として、機能としてもっていることで、私的なものではなく、公共的なものであることが分かる。その概念は作品が創造され、展覧され、鑑賞され、解釈され批評されるそのプロセス全体をつつみ、しかも芸術の意志的行為や目的を含むことで問題となる。ミュージアムが制度として確立された近代以降では明瞭にこのことが社会的理論として理解されるようになった。ミュージアムは社会的コミュニケーションの多様な機能を担って作用している。

これはミュージアムが公立私立に関わりなく、またその設立の経緯が、山形美術館のようにギャラリー的機能から出発したもので、宮城県美術館のように当初から独自に所蔵している作品の展覧を主務とするものでも変わらない。ミュージアムの役割は社会文化の制度的施設（インスティテューション）として存立しはじめたときに生じる。これは自明のことと捉えられているからあまり自覚されない。しかし美術工芸作品の展示陳列において、作者や企画者（あるいは発信者）と受容者あるいは消費者との間の関係は、芸術のコミュニケーションの問題に含まれる。とくにこの関係に大きく関与しているのは作品の存在である。ミュージアムの学芸員は企画者、発信者として公共的なコミュニケーションのメッセージを伝える機能を受け持っている。

福島県立美術館が市町村自治体、学校、友の会や協力会などへ鑑賞活動を指導する事例、福島県立博物館の伝統技術の紹介、学校への学習支援や古文書解読などの生涯学習講座の活動は、地域の芸術的社会教育への寄与だけでなく、広域にわたる県内諸地域の豊かな美的コミュニケーションの行為を果たしているはずである。

この5のトピックに関する重要な鑑賞教育について、具体的な事例があげられ、貴重な指摘となった。

安西昊雄氏（学会副会長）：

以前から精巧な図版で親しんでいた尾形光琳の『紅白梅図屏風』を熱海のMOA美術館でやっと鑑賞できた。目の当たりにしたその作品から大きな感動を味わった。この体験は芸術のもつ真の素晴らしさを会得できたことであり、何ものにも代えがたい美術作品の鑑賞となった。美術館や博物館はオリジナルの現物に触れる機会を提供しているわけで、社会教育の上でこの効用と機能を社会的に自覚することが大事である。

この指摘に関して、美術館・博物館の学芸員であるパネリストから特に発言がなか

ったが、鑑賞を含め、コミュニケーションはミュージアムの学芸の仕事をしている各パネリストには格別に意識されないまま、あたりまえのことと了解されていることが分かる。今回のシンポジウムでも観取されたが、これはミュージアムの制度としての、機構としての仕組みや規則が、その組織の中で、また外部に対しても共通に理解されていることによるだろう。当然ミュージアムの組織が普通の意味でよい状態にあることが暗示されていると見られる。

しかしコミュニケーションは自覚されなければならない性質のものである。たしかに芸術はコミュニケーションである。作者と作品、企画者を含めた発信者が受信者である鑑賞者をつないでいる共通の理解があるからである。社会学的に〈協力の原理〉と呼ばれるものである。これが広く共有されている場合には暗黙の状態に止まっている、あたりまえのことと理解されていることを意味している。ところが前衛芸術や異文化の芸術など未知のものに出会ったときは、それら作品の扱いにおいて、また批評や解釈がとくに要求されて、芸術の問題にぶつかることになる。未知の芸術作品が理解されるか否かに直面することになる。

この点で、加藤氏がそのポスターとともに紹介した山形美術館における『生まれるイメージ展』は、新しい表現に取り組む作家を発掘する企画として注意をひいた。停滞している現代美術の状況に風穴を開けるその試みは、これまで数少かった地域における現代の創造への発信点となり、もっと重要なことは、新たな批評の存在である。この出来事が芸術の概念を取り込む〈協力の原理〉としてコミュニケーションとなるか、関係者による解釈がなされ、理解されて、多くの人の経験の地平を切り開くことができるかどうかは今後問われることになるう。

ここで示唆されるのは、芸術活動の場でのコミュニケーションが批評をともなって現代美術の創造へとつなげることができるかどうかである。アメリカの前衛美術の例をもちだすこともないが、一つだけ、H・ロ・ゼンバーグとアクション・ペインティングやR・ウォルハイムとミニマル・アートが前衛芸術に市民権を与えてアメリカのコミュニケーション社会を確かに築き上げたことが思い起こされる。

このトピック、コミュニケーションの問題に関連して、フロアーから次の発言があった。

ちなみに群馬大学の学生が最も良く行く美術館としては、高崎の山田かまち美術館や東村の富広美術館がある。それらは純粋に美術的面というよりむしろその詩や文章の魅力に支えられ、作家個人の独自のエピソードにとんだ人間的存在感にまず焦点が当てられた私立美術館である。とりわけテレビでしばしば話題提供され、一般向けする理解しやすい庶民的美術館である。地域の人々がまずは美術なるものに触れ合い、そこから次第に本格的なものへと関心を広めていく出発点として、コミュニケーションの観点から、そうしたものにも一定の評価が与えられると思う。いずれにせよ今日、マスコミの効果的活用は芸術政策としてもはや必須の条件と思われる（團名保紀氏・群馬大）。

さらに次の点も示唆にとむ。

画廊喫茶ならば生き延びられるのではないか。民間の立場で芸術を普及する人材が不足している。かつてメジチ家はその任を果たした。文化政策には国家も介入した。公共的視点も必要ではないか。そうしたなか、山形美術館は財団のそれとして私的な強さを発揮すべきである。学生に対してアンケート調査を試みると、ミーハー的作品を好む。山田はまちや星野富弘などエピソード性をねらっているものが評価されている。それらはもとより美術性は希薄で、マスコミ経由で受け入れられている（團名保紀氏・群馬大）。

付；

以下にフロアーの発言のうち、主要なものを2点示して参考にしたい。

立原慶一氏（宮城教育大）：

かつて高知県でも同様に美術家が美術館設置のための署名運動を始め、設置場所などをどこにするかなど、紆余曲折の上自動車がなければたやすくいけないような所に作られた。署名運動を行った人達は距離が遠いものの、ようやく自分たちの作品を公共の施設に展示できると思っていた。しかし美術館は貸し画廊ではないとの理由で、会員展はもとより県展も断られた。しかし政界やマスコミ界からの強い働きかけによって、他に適切なアートホールが完成できる間だけ県展だけは開いても良いとの理由で、数年間開催されたことがある。県展期間中は美術館の催し物にも入館者がいたが、県展が他で行われるようになってからは殆ど地元の人たちが訪れることもなくなった。彼らの意見としては美術館は偉ぶっていて、彼らにとってあまりリアリティのない現代美術展ばかりを開いているとのことであった。

そうした国内の一般的な状況にあって、山形美術館は地元とのつながりにおいて、独自の性格を形成し続けていて素晴らしいのではないか。宮城県美術館の『みやぎの5人展』『アートみやぎ』は批評の観点を持って行われたというが、美術館が評価するほどの作家、作品ではないように感じられた。これに対して、県展や河北展、全国規模の公募展の評価はどのような性格のものとして扱われるのか。むしろ彼らの方が制作に熱心であり、美術の鑑賞と表現に積極的で元気があると見られる。

團名保紀氏（群馬大）：

東北の代表都市である仙台における昨今の重要な画廊の閉鎖への動きは地域全体が経済、文化、社会的に危機の状況にあることの象徴と思われ、はなはだ心が痛む。そもそも東北では戦前有力な画廊がなく、美術制作者にとり作品を広く世に問い、商品的価値付けと流通の可能性を高めることが困難であった。それゆえコレクターを養成する道が乏しかったが、そのことは芸術における前衛的なものの豊かな登場を阻み、伝統主義、中央追従の流れを招来しただろう。

ひるがえって、例えばイタリア・ミラノでは数多くの前衛運動を主導し有能な芸術家に発表の機会を与えた個人画廊主が20世紀美術史上、栄誉を与えられている。わが国でも、戦前の中央では、絵画頒布会の活動は活発で有力な画廊もあり、コレクター層が養成され、一例として原山溪のごとき教養豊かな財界人、芸術文化の有力なパト

ロンも出現し得た。何より政、財、知識階級の結びつきは中央で強固なものがあつた。明治の初期にはもっぱら官主導の芸術政策が展開されたが、やがて大正期ともなれば芸術上、次第に私人の有力者の側の指導性が強くなっていった。

ではイタリアルネッサンスの都、フィレンツェで芸術推進のためにいかなる役割を私人達ははたしたのであろうか。国家とか教会という公的存在がいつの時代においても芸術文化の推進役として重要であることは明らかである。しかし俗にフィレンツェ文化はメディチ家が作ったともいわれる。そのメディチも16世紀になるとトスカナ大公として君臨し、公的、国家的見地からの芸術政策を先頭に立ち上げ展開することになった。いずれにせよ上、即ち公的な側からのベクトルと下、民間の側からのベクトル、これら二つの推進力が両様相まった総体としての優れたルネッサンス文化であった筈である。そして公的な芸術はいつでもあるが、私的なものから発せられた文化の動きが目覚しく展開する時代こそがやはり真に豊かな時代であるといえるのであろう。

わが国の戦国時代や江戸時代をみても、狩野派のごとき官製文化の展開がある一方、堺の町民文化や浮世絵の庶民的魅力の世界が遅く存在するのである。

さて話を美術館の問題に移そう。公立の美術館には公的責務があり、地域全体の芸術文化の高揚を図る拠点たならなければならない。しかし中立性も必要であり、館長やキュレーターの個人的趣味を強く打ち出すことは難しい。勢い前衛的なものや特殊な新しい観点に立つものは避けられて行く。一方私立美術館は時代の先端を行く個性的な芸術の展開を推し進める拠点として可能性を大いに発揮出来る。山形美術館では地域に公立の美術館が存在しないがゆえ、私立美術館であるにもかかわらず公立美術館的役割をも様々に期待され、幅広く展開せざるを得ない状況がある。多忙なその運営の中にあっても上からのベクトルと下からのベクトルを統合出来、芸術文化の理想的展開を実は図れるという有利さへの認識に立つ。そして本来私立美術館としてとりわけ下からの、私的なものの自由な発意の可能性が大になるという認識に立ち帰り、地域文化を刺激する種々の意欲的企画を打ち出して行くことが期待される。

事後の課題

以上の5つの問題に関連して、本来なら文化政策の評価と改革への提言、地域の独自性と文化の創造性の維持、国内外の交流の推進などにも触れなければならないだろうが、もし可能なら別に機会に譲ることになる。また、新たな問題提起として、消費と再生産の視点から角度を変えて追求することも必要であったろう。しかしこの点も次回の宿題ということになる。

なお、このシンポジウムの中でテーマに即して、また各項目において、学会自身の何らかの動きが問われているかも知れない。もし学会にそれらに対する社会的使命が託されているならば、真剣に考慮してみなければならないと思っている。この点に関して、本報告ではごく控えめにいくつかの提言を含めて語ることにしただけで、今後引継がれていると考えている。

(文責；齋藤稔)

参考文献：

なお本シンポジウムの趣旨や幾つかのトピックスのために、主要な参考文献として次を参照した。

ユルゲン・ハバーマス 河上・フーブリヒト他訳 『コミュニケーション的行為の理論』
上・下

未来社 1987 (8).

後藤和子 『芸術文化の公共政策』 勁草書房 1998.

堀内克一 『地方文化再生の道』 公人の友社 2000.

美術品公開促進法研究会編 『美術品公開促進法 Q&A』 ぎょうせい 1999.

仙台事務局 〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉

宮城教育大学美術科立原研究室

Tel./Fax. 022-214-3449

Emale;tatihara@staff.miyakyo-u.ac.jp / msaitoh@mse.biglobe.ne.jp